



# ピッポ新聞

2009

8

No.246

子どもの本専門店

## ピッポ

年間購読料 ( 送料込み ) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

「E・T・シートン研究会」

設立総会を開催

去る7月5日(日)午後1時半～4時、調布市教育会館にて、「E・T・シートン研究会」設立総会が開催されました。総会は、左記の「要旨」の説明の後、あらかじめ、お知らせしていた案内に賛同して集まっていた熱心な参加者の方達により、規約をめぐって意見交換や討議がされ、総則、目的と研究事業などが決議されました。

この日をもって「E・T・シートン研究会」が発足しました。

会長 津田櫛冬 事務局長 宮代一義

### 総会設立の要旨

子どもの科学絵本はどのようにして生まれ、読者に届くのか。私たちが知り得るのは、絵本からの情報だけです。しかし、幾つかを比べたり、原書と照らし合わせたりすると、なんと多くの疑問が見えてくることでしょう。卑近な事例には、

出版社が、読者の疑問や指摘に真摯に対応していない。

間違いを認めても、既に購入した読者は、そのことを知る術がない。

従って、未修正の科学絵本は、今もって流通を続けたままである。

などがあります。偽装商品や偽装食品は、社会のシステムがきちんと対応していませんが、偽装書籍を読む子どもたちは、犠牲者であり続けているにも拘わらず、良心的といわれてきた出版社が無視・軽視している状態に驚きを禁じ得ない。自然を知ること、知らせることの難しさ。訳者が自然に関心がなくて本当に訳せるのか。という、そもそもの疑問も生まれます。

動物文学の創始者ともいえるシートンについても、その真の姿は日本ではまだ多くの人に知られていないのが実情です。一方で、ロシアに於けるピアンキは、「ロシアのシートン」と呼ばれ、シートン作品の紹介者でもありました。

子どもたちは、外国、国内を問わず、ナチュラリストの作品を、誠実な訳と内容で受けとる権利があります。

そこで、「E・T・シートン研究会」では、自然を扱う書籍の諸問題を考えていくことになりました。

私たちは、先住民族の世界観を含む諸思想の潮流と関連の上にシートンの自然文学と動物学を再認識する一方で、シートンの業績がどのようなジャンルや科学的系譜に受け継がれているかを具体的に見ていくことで、シートンが成し遂げた仕事の領域をよりよく評価する環境をつくりだして行きたいと考えます。

「E・T・シートン研究会」の初回の集まりは、シートン動物記「オオカミ王、ロボ」を読み、語る。がテーマです。

開催日は、追ってお知らせします。多くの人の参加を歓迎いたします。

# ピアンキの名作『くちばし』

## 二つの版の謎をとく

### 第十四回

## 読者不在の「見解」

動物学者 今泉吉晴

私は前回と前々回の二回をかけて、福音館書店の書籍集部長、米山博久氏の手になる「見解」を慎重に検討しました。「見解」を構成する五項目の要点のうちの二項目をみたにすぎません、そのどちらにも「見解」の信頼性を大きく損なう、とんでもない虚偽と事実誤認が関わっており、おざなりの作文にすぎないことが明らかでした。

しかし、「見解」は出版社を代表する判断であり、方針の表明です。広範な影響力をもつことからその性格をよく見定めておくことが大切です。行きつ戻りつしながら、もっともらしい文章の本当の意味は何か、明らかにしていきたいと考えます。

手短かにこれまでの検討内容をふりかえっておきます。「見解」の2は、「自然科学の観点からの訳文のファクトチェックについて」と題され、私が指摘した田中友子氏の誤訳の一部(二件)は、福音館書店がファ

クトチェックで強いて訳文を変えさせたため、とじていました。ところが、その一件である、ネズミをモグラと誤訳させたという「ファクトチェック」は(本当にそのようなファクトチェックがあったとは信じがたいことですが)、実態は科学的なチェックというにはあまりに通俗的で、専門性のかけらも認められず、たんなる常識の問題でした。

そしてもう一件、ハシビロガモが潜水したと田中友子氏が誤訳した問題は、田中氏ご自身が私への反論の中で最初から原文の意味をとらえそこねて誤訳してしまった、と書いています。そうであるのに米山氏は、田中氏が「もともと正確に訳していた」のをファクトチェックで「現在のように変えていただいた」と書いていました。訳者の誤訳の責任がじつは出版社にあると、何の事実の確認もないままかつてに背負い込むとは驚いた「見解」というよりありません。

しかし、ファクトチェックを誤訳の責任問題と結び付けたのは単なる思いつきであるはずはなく、隠された理由があるはずだ。

そして、次に検討した「見解」の4もお粗末でした。米山氏は、「『くちばし』どれが一番りっぱ?」の底本変更について「と題された「見解」の4で、「ロシアの蓄積話の系譜」という判断基準をもちだし、物語の最後の一文がない方がいいと判断した、と底本変更の理由を説明しました。ただそれだけの最初からわかっていた単純な理由で、同社を代表する優れた編集者である松居直氏がよしとしたはずのオリジナル版のよさを無視して、私がいっしょに簡略版に底本を変更した、というのです。

ところが、私はすでに二〇〇六年の春にこのピアンキ作品の担当編集者から底本の変更について別の説明を受けています。ところで、米山氏は、この作品の原本に二つの版がある、と簡単にいいますが、それは

今泉氏はこの一九二四年版のテキストが、第三者によってオリジナルテキストに手が加えられたもので、底本とするべきでない主張していますが、その主張は田中友子氏の反論にもあるように根拠のないものと考えています。ですから、その主張に基づいた『くちばし』どれが一番りっぱ?』の訳を先訳に戻すべきだという今泉氏の指摘については、これも根拠がないと考え、この作品は、これからも出版し続けていきます。

「見解」4の「ネバーランド」十巻に掲載された福音館書店の「見解」より。三節ある「見解」4の最後の節

私が『ネバーランド』誌八巻に書いた批評の中で初めて明らかにした新しい認識です。私の表明より以前には、原本のタイプを二つに整理して理解する明確な判断は、少なくとも福音館書店の私への説明の中には含まれていませんでした。すなわち、前回（七月号）で引用した担当編集者から私に伝えられた底本についての説明にこう書かれていることに、今一度、注目しておくことが大切です。

「ビアンキという人は、童話集とか雑誌とか同じお話をいくつか書き分けている方のようです。」（二〇〇六年五月二四日に伝えられた担当編集者の底本についてのコメント）

「（底本とは）『著者が手を入れた決定版』というような意味ではなく、『翻訳する前のものと本』という意味です。ビアンキの孫から送ってもらった絵本の各バージョンにも、ときどき微妙な変化があります。」

（二〇〇六年五月二六日の同コメント）

つまり、担当編集者は、それぞれに微妙に違う版があり、どれが決定版というのではないが、今回は適宜選んだ底本を『翻訳する前のものと本』という意味で底本といっている、と私に伝えてくれます。これが『くちばし』どれが一番りっぱ？』が刊行された直後の担当編集者の認識であり、大きく二つの版がある（そして、そのどちらがいいか）、という理解にはまだ至っていませんでした。米山氏のいう二つの版のうちの簡略版が決定版という説明は、底本

の決定に至る本当の経緯からかけ離れた後づけの説明にすぎないことが明らかです。

以上、前の二回で検討したことの要点を振り返ってみました。これで、前回に扱った「見解」の4の残りの部分、Cを見る準備ができました。4のCで米山氏は「田中友子氏の反論にもあるように」「私の主張である」「一九二四年版のテキスト（簡略版）が、第三者によつてオリジナルテキストに手が加えられたもので、底本とするべきでない」には根拠がない、とまず言い切りました。

では、一つ質問させていただきますが、福音館書店は自身の論拠をまるで示さず、論争の一方の側の論拠を借用して判断材料につかうとは何たること、何か特別な事情でもありなのでしょう？

米山氏は、簡略版には第三者の手が加わっているという私の主張に根拠がないという、その主張の根拠を示していません。また、田中氏の反論にあるように根拠がない、といいますが、田中氏は反論のどこで、私の主張に根拠がない、と示すことができたのでしょうか？ それはどこに書いてあるか、それを説得的な説明と受け止めることができる根拠を示さなければ論証になりません。

前回は私が担当編集者から、田中友子氏が伝える言葉として、ビアンキがかつてにテキストを変えられたこともある、と述べていたと説明を受けていることを、お伝えしています。さらにまた私はこの連載で、簡略版はオリジナル版を改変したものであ

る可能性が高いことを明らかにしました。

そしてさらに前々回、私は田中友子氏が私の書いた文章をまったく違う意味に変えて、自分にとつて有利な論理をたてる論拠に使うという悪癖をもつことを明らかにしました。これでは福音館書店も、全面的には田中氏の反論を信用できないのではありませんか？ すなわち、現時点でなお「見解」4のCが成り立つかどうか、はなはだあやしい事態に至っていることが明らかです。

そして4のCの後半の文章ですが、米山氏はこう書いています。

「その主張（根拠のない主張）に基づいた『くちばし』どれが一番りっぱ？』の訳を先訳にもどすべきだという今泉氏の指摘については、これも根拠がないと考え、この作品は、これからも出版し続けます。」

私が『くちばし』どれが一番りっぱ？』を破棄して、田中かな子氏の旧訳（『くちばし』）にもどすべきだ、と述べたのは、単に簡略版が書きなおされた版であるから、という一つの理由によつていられるではありません（簡略版とオリジナル版は内容が違ふのであり、同じ藪内正幸氏の絵を使うのなら底本はオリジナル版にすべき、というまっとうな理由がまずあります）。他に多くの理由があります。

その第一は、単純明快です。田中友子氏の訳文の筋が通らず、読み進むことができないからです。そのことに私は『ネバーランド』誌八巻の批評の冒頭の一節で簡単に

ふれました。

私はこう書きました。「新訳」『くちばし』どれが一番りっぱ？』(のP8で、タシギが沼から見上げている。そのタシギが『りっぱなくちばしというものは』と話したので、主人公のヒタキが『ふりむく』、すると、タシギのくちばしがアシのしげみからのぞいている。」

同じタシギが同時に異なる場所に存在する、というありえない想定の記事で、読者はここで読み進めなくなりませぬ。ロシア語原文を見なくても誤訳と分かるこんな文章で、どうして先訳を絶版にすることができると、どうして先訳を絶版にすることができると、というのが私のわかりやすい主張ですが、それは批評の冒頭で述べた一例にすぎませぬ。

しかも、この誤訳はじつは単純なケアレミスではなく根が深いことを、私はこの連載で明らかにしました。「(ヒタキが)声がしたほうを見る」と、タシギが沼から見上げている、というふうに訳した田中友子氏は、この部分のロシア語原文が、耳で鳴き声を聞きとつた目には見えていないタシギの存在を記述している、という状況描写であることを理解できていません。それゆえ、「(ヒタキが)声がしたほうを見る」と、見えた、と誤訳しました。簡単にはなおせない、根の深い誤訳です。このことを米山氏はわかっています。

そして、わかっているからこそ、4のCの最後の一文「ですから、その主張に基づいた『くちばし』どれが一番りっぱ？」

の訳を先訳に戻すべきだという今泉氏の指摘については、これも根拠がないと考え、この作品は、これからも出版し続けていきます」と、米山氏は宣言することができました。

この宣言は、私の批評にもかかわらず田中氏の『くちばし』どれが一番りっぱ？』を刊行し続ける、という出版社としての読者への約束であって、読者にはまるで目が向いていないことも明らかです。なにしろ、おなじ鳥が同時に二カ所に存在するというあり得ない記述の絵本を売り切れるまで売る、その後、どう訳文をなおすか見通しもない状況にあると考えざるを得ないのでから。

まるで筋が通らない「見解」ですが、あえてほぼ現状のまま刊行し続けると宣言する以上は、読者の問い合わせに対して、担当編集者が退職したから答えられない、といった無責任な対応はなさないよう、お願いしておきます。関連してさらに、いくつか質問しておきたいと思えます。

私はもう一つの作品『おしゃべりなもり』も問題にしています。もともと先訳がある『くちばし』どれが一番りっぱ？』は、誤訳が少なくても当然なのです。『おしゃべりなもり』の訳文ははるかに大変な状態にあるのであって、「こちらはずっとさるのではありませんか？ 私は科学書編集長から二〇〇七年六月に、田中友子氏から『くちばし』どれが一番りっぱ？』については、誤訳の訂正原稿をもらったが、『おしゃべりなもり』については、訂正原稿は出されていない、

と聞いています。

それを聞いた当時、私はなぜなのか首をかしげたものです。しかし後に、田中友子氏が書いたとされる反論の最初の原稿に「今泉氏が指摘している誤訳は、編集担当者が訳者(田中友子氏)にそのような訳にするように、と指示してさせたもの」と、という意味のことが書かれていた(詳しくは『ピツポ新聞』二〇〇九年七月号参照)と聞いて、なるほどそれなら、私の誤訳の指摘は『おしゃべりなもり』に集中していることでもあり、訂正原稿は提出されないワケだ、とひとまず納得しました。

しかし、このように考える場合には、最初の反論原稿には、『おしゃべりなもり』についてふれた部分、すなわち、誤訳の原因は出版社の指示にしたがったため、という内容の記述があつた、という前提があります。それは福音館書店にとつては不都合なことであり、削除するよう交渉がもたれた、その経緯の中で三回の書き直しがおこなわれ、最終的に刊行された反論には『おしゃべりなもり』にまつたくふれない内容になつた、と考えることになりました。

米山氏が「見解」で、『おしゃべりなもり』を今後、どうするかにふれないのは、そのような経緯であるならば、当然の帰結でしょう。私は科学書編集長から、私の批評に対する唯一の感想として、「『おしゃべりなもり』はこのまま絶版になるだろうが、『くちばし』の(藪内氏の絵は福音館書店として守りたい)と言われています。福音館書店の本音と思えます。

しかし、米山氏が「見解」で、田中友子氏が私の批評の『おしゃべりなもり』の部分に反論していない事実と言及しないのみならず、また同書への対処の方針を明らかにしないでいるのは、私の批評と読者を無視したまことに身勝手な行為であり、「見解」のあるべき姿から遠く離れています。

そこで米山書籍編集部長にお伺いしますが、その後、『おしゃべりなもり』について、田中友子氏の手になる訂正原稿は科学書編集部にとどまっているでしょうか？ それとも、その後の経緯で、『おしゃべりなもり』の誤訳の責任は訳者にはないので、訂正原稿は出さない、ということになったのでしょうか？

なお、この作品について米山氏は、「おしゃべりなもり」の掲載作品の選定、および構成について」と題する「見解」の3で触れています（次回に取り上げる予定です）が、誤訳の問題とそれに対して出版社としてどう対処するかについては、以上のとおりふれていません。

さて、以上は「見解」4のCの後半、「……この作品は、これからも出版し続けていきます」という宣言は、禍いを大きくするばかりであることを改めて示し、撤回するよう求めるものです。

ところで米山氏は、「見解」でふれた田中友子氏の反論の理解で大きな誤りを犯しました。そこで、少なくとももう一度、反論をもう少し丁寧に読む必要があります。すると、私の批評での田中氏の誤訳の指摘

の主だった二三は、田中氏がまず否定しながら実質においては認めている、とわかるでしょう。

たとえば、私はこの物語にでてくる鳥の名は、ピアンキがこの物語での登場の仕方によろよい特徴を選んでつけた、仮の名であることを明らかにしました。田中友子氏は反論で、もともとそのことに気付いていたが、名前が長くなるので採用しなかつたといつて、訂正は拒否しています。すなわち、実質は私の解釈が正しいと認めているのです。

また、私は題名にもある「りつぱ」という言葉の乱発はよくない、と批判してきました。原文では意味内容が違っていくつかの形容詞で表現されており、原意を大きく変えることになって不適切とも批判しました。

それに対して田中友子氏はある程度の行き過ぎを認めたものの、子ども読者の判断にまかせたい、と書いて、自らの判断を放棄しています。これもまた私の主張をきっぱりとは否定できなかった証拠でしょう。

もし、原文に忠実であることを翻訳の基本とするなら、田中氏はこれら二つの私の指摘を受け入れないわけにはいきません。そして、そうなればこれら二つに関連する訂正だけでもたいへんな数になります。そして、さらに重大な意味をもつ訂正の必要を私はいくつもしています。それらも近い将来、正当な指摘であると認められる可能性が高いのです。

とはいえ、当面、福音館書店はだんまりを決め込み、「見解」を撤回はしないでしょ

う。そこで、「見解」の適否にかかわるも一つ一つの大きな問題のありかをここで指し示しておきたいと思えます。

米山氏が「見解」を執筆していた時すでに、田中友子氏が福音館書店から刊行した第三作『どうぐはなくても』が刊行されて一年近くが経過していました。ピアンキの傑作を無惨な文章と絵にかえたこの絵本は、もはや翻訳とはいえない、と私はこの連載で結論しました。そして、この「文」作品の性格は、田中友子氏の先行する二作品、『おしゃべりなもり』と『くちばし』どれが一番りつぱ？』と酷似しているのです。

米山氏は書籍編集部長として当然、この田中氏の「文」作品を視野に入れながら「見解」を書いたでしょう。実際、そうであつたとしたら米山氏が「見解」に書いた「くちばし どれが一番りつぱ？」を出版し続けていきます」という言葉は、おそるべき鈍感さといわねばなりません。

『くちばし どれが一番りつぱ？』の末尾の田中友子氏のつけ加えの文章と『どうぐはなくても』の末尾のつけ加えの文章とは、同じ質のものであることは明らかではありませんか。一方は「訳」、もう一方は「文」となつてはいるものの、翻訳の姿勢は変わっていないことを、末尾のつけ加えの文章を比べることで明らかにできます。

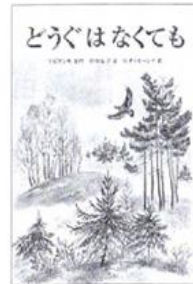
うれしいことに、私はここで自分の文章を改めて引用する必要がありません。市川美代子さんが、科学読み物研究会の機関誌、「子どもと科学よみもの」、二〇〇九年六

月号（No. 392）に書かれた「2008年度に出版された新刊を中心に」という論文の中でほかならぬ田中友子氏の「文」作品『どうぐはなくても』をとりあげました。

話題2  
原作と違う物語が展開する絵本の出版について

① 新版と旧版の比べ読みをしてください。  
『どうぐはなくても』

（V・ピアンキ原作  
田中友子文 N・チャ  
ルーシナ絵 福音館  
書店 2007・4）



比べ読みのすすめ  
市川美代子さんが、科学読み物研究会の機関誌、「子どもと科学よみもの」、2009年6月号（No. 392）に書かれた「2008年度に出版された新刊を中心に」の中の「話題2」

市川さんは、新刊研究会の報告の中で話題2として「原作と違う物語が展開する絵本の出版について」という項をもつて、「新版と旧版の比べ読みをしてください」と呼びかけています。ここでいう「新版」とは、『どうぐはなくても』です。また、旧版とは、私もこの連載の第七回（ピッポ新聞二〇〇九年一月号、P4）で取り上げた内田莉莎子氏の訳による『森のだいくさん……おのがなくても家がたてられるか?』（『絵本＝ピアンキ動物記』、一

九七三年、理論社、に集録。E・チャルーシン（絵）です。

「話題」自体は題名にあるとおり、二つの翻訳作品を比べ読みするよう読者に呼びかけているのですが、ここでは、それぞれの終わりの文章を比べるところを中心に紹介します。

まず市川さんは、『森のだいくさん』の末尾の文章をとりあげて、こう書いています（これは原作にある通りの文章です）。

「おい、わし、わし、おのもつてきてやったよー！」と、ぼくが叫ぶと、「ごしんせつにありがとう。それじゃ、えだの山に、そのおのをなげこんでください。もつともつと、つみあげるつもりですからね。きつとがんばらないですになるでしょうよ」。というわしの言葉で、お話は終わっています。ぼくが斧を投げ入れたかどうかはわからないという結末で、終わっています。

つぎに市川さんは、『どうぐはなくても』の相当する部分について引用しながら、こう書いています（こちらは田中友子氏によるつけ加えの文章があります）。

「ワシさん！えだをきるのはいへんでしょ？どうぐをつかいませんか？」ワシは「ありがたい。ではそのどうぐとやらをいえに なげこんでくれないかね。そうしたらそのうえにどんどんえだをつみあげていくから。おかげでとてもがんばりようないえができるよろうよ」

いえができるよろうよ」

この文章で、お話は終わらずに、最後の場面が追加されています。「どうぐは、ワシのいえのざいりょうにされてしまいました。」「背景を切り取って、大袈裟な大道具が巢の材料として投げ込まれた、卵が二つ産み落とされたワシの巣だけが大きく描かれています。「どうぐはなくてもとりはみんないえづくりのめいじんです。とりたちはきょうもどこかでいえをつくっています。ほらきこえてきませんか？とりたちのすをつくるおとが……。」「の文章で、終わりです。

以上のとおり、市川さんの主旨は二つの絵本の比べ読みのすすめですから、ご自身の感想は控えめです。しかし、原作に忠実な内田莉莎子氏の訳による『森のだいくさん』の結末について、「ぼくが斧を投げ入れたかどうかはわからないという」終わり方であることに注目しています。それは、私がこの連載で作品の終わり方に注目した観点と重なっています。

その上で市川さんは、田中友子氏の「文」作品である『どうぐはなくても』では、内田氏の訳の結末の文章に相当する文章で話は終わらない、として「最後の場面が追加されています」以下の文章が追加され、絵もその文章に呼応して奇異な様相を呈する、と書いています。そして「どうぐは、ワシのいえのざいりょうにされてしまいました」以下の大量のつけ加えの文章の存在を明らかにしました。すなわち、事実関係をしっ

かり確認した上で比べ読みするよう、呼びかけました。追加された田中氏の文章が読者の自由な想像を妨げて、作品を壊していることは明らかです。そして、私がかつとも感動したのが、続く「木の時代」の指摘とそこから帰結される斧の大きな意味です。市川さんは、「昔話から広がる木の世界」を読むと、昔話には木と人々の深い関わりをもった世界が広がっていることに気づかされます」と書いて、石の斧を木にくくりつけて使った古代から続く、斧と木の親しい関係を見ます。



### 道具を投げ込まれたワシの巣

田中友子「文」による『どうぐはなくても』の裏表紙にある N. チャルシナによる絵。原作は主人公の「ぼく」が手にした斧をワシの巣に投げ入れたかどうか、読者の想像にまかせます。しかし、この「文」作品はたえず先回りして奇怪な絵で想像の楽しみを奪います。

さらに、人間が火と道具を使う生きもので

あるという特徴を想起し、「ビアンキの物語の世界には、森の鳥をたずねるのには、道具としては斧こそがふさわしいと思う」と結論づけています。

その上で、田中友子氏によるビアンキ作品の改変の問題にふれてこう書いています。

新訳は「訳」ではなくて、田中友子「文」となっているが、ビアンキ原作とある以上、ビアンキが子どもたちに素朴に伝えたいと思っている作品の世界を大切にしたい。森に大袈裟な七つ道具の大工道具をもつてでかけるということは、不自然であり、それらをワシの巣に次々と投げいれるということは、あまりに無神経で、私にはとても理解できません。ビアンキの作品の精神、本質を変えているように思います。新刊研でも、最後の場面を目にして、「ええっ？」と、意外に思う人が多かったのです。

もちろん、私はこの市川さんの文章が、田中友子氏の『くちばし』どれが一番りっぱ『やおしゃべりなもり』の批評になっている、というつもりはまったくありません。ただ、この連載で書いた『どうぐはなくても』についての私の批評と重なるところが多いと知って嬉しく思いました。そしてまた、市川さんの「ビアンキの物語の世界には、森の鳥をたずねるのには、道具としては斧こそがふさわしいと思う」という言葉に、斧がいつそう普遍性をもつ道具であることを教えられ、喜んでいきます。

田中かな子氏の訳による『くちばし』は、『くちばし』どれが一番りっぱ？』のような、よけいな文言のつけ加えはなく、原文に忠実な訳であって、筋が通らなくて読み進めなくなることもありません。この訳を越えるとはつきりわかる訳ができたというならともかく、『くちばし』どれが一番りっぱ？』と変えなければならぬ積極的な理由はどこにもみあたりません。改めて福音館書店に問いますが、疑問だらけの『くちばし』どれが一番りっぱ？』を本当に「これからも出版し続けていきます」でいいのですか？

## お知らせ

### 「しずおか古本市」

八月十九日（水）～二十五日（火）

松坂屋静岡店本館7階催事場

（最終日は午後4で閉場）

ピッポ古書クラブも出店！



「目録」できました。希望者に送品します。お申し出ください。

## 骨董市

「君はまだ脇が甘い」

その2

先月号で最初の骨董市は、よく分からないうちに終わってしまったと記したが、それはその通りだったのだが、このとき、ぼくは一点だけ落札もしたのだった。積極的に「円！」と声を出さないのにどうして落札できたのか？今月はそこからはじめようと思う。それを話すことで、骨董市の雰囲気は少しはお伝できるのではないかと思うし、あわせて、骨董市で古本屋が何を求めているかもお伝えしたい。

落札したのは、NHKのシルクロード紀行のセットなど中国関連本を数セットと、小学館の四季の野鳥の紀行本などのセット物や「太陽」の別冊などいろいろ混じっていた。ざっと50〜60冊くらいあり、段ボール箱2個分の量である。このくらいの冊数は古書組合の市会ではごく普通の量だが、骨董市の出品としては、量的に多いもののようにだった。

「振り」（競り）はこんな風に始まるのである。「この本の山、2千円でどう」「誰も声を掛けない。すると次に「これ、中国関係の本が揃っているよ、だれかいないの？・・」（この間少し間がある）じゃ、千円で

どう。誰かいないの？」。会場にいる5〜6人の古本屋はだれも反応しない。買う気がまったくないようだ。でも、千円は確かに安い。そこで、ぼくは思わず「はい！ピッポ、ピッポです」と手を挙げていたのだった。次の瞬間「はい、この本の山、千円でピッポさん」というわけで、思いがけず落札してしまったのである。

ぼくが落札した「本の山」千円は、古本の市会なら少なくとも3千円くらいで、落札する人がいると思うのだが、ここに来て古本屋は見向きもしなかった。彼らは求めている「物」が、全然違っているようである。

一つだけ難点をいうと、骨董市の本は、古書の市会の本より汚いのだ。ぼくもそうだが、古書の市会に出品するときは、少しでも高い値が付くように埃を拭いたりして、多少は気を遣うのであるが、骨董市の本は汚れたまま、埃まみれのもあるのだ。

ところで、ぼくが発した「はい」というのは、偶然であったが、れっきとした「市」用語であったのだ。それ以降みていると、時々誰も応札しない「物」があると「円、だれもないの？」「じゃー 円でどう！」という、誰かが「はい！」と声をあげる、それで落札となるのであった。また、こんな時もある、「これ 円、『ハイ』の人は？だれかいないの？・・」。

ぼくはこの「振り」というのは、初めての経験ではない。というのは、毎月の浜松の市会はずべて「振り」で行われているからである。ただ、浜松の市会の「振り」の

雰囲気と、この骨董市（人数もこちらの方が多し、断然声も大きい）の雰囲気は少し違っていて、不慣れなゆえ、声が出なかったのである。

浜松の場合は理事長のK堂さんが「振り」をやるのだが、K堂さんはこなぶうである。「さて、これ一二三（ヒーフミー）だいたい百冊はあるな、じゃ嘘八百からいつてみようか、八百円！」とか、漫画や写真集などの束なんかの場合は、「これ俺にはわからんな、安くからいつてみようか。千円でどう」とか「おおーこれ が入ってるじゃん。これはいい本だ、これ1冊で3千円はあるな。じゃー、2千円からいつてみようか」という具合である。

漫画や写真集などのサブカルチャー的なものは、K堂さんのように、ぼくにもその評価はさっぱりだ。浜松の市会にはこの分野を得意とする人が5〜6人いるのだが、彼らを見ていると結構面白い。古い芸能雑誌や週刊誌・娯楽や趣味の雑誌や漫画雑誌・あるいは写真集やポスターなど出が品された場合、たとえば同じ「少年マガジン」がある時は「5百円！」といつても見向きもしないのに、別の時には「1万、2万・3万」と競る場合もあるし、映画ポスターなど段ボール箱にいつていばいあつても、やはり見向きもしない時と、数枚でも、たちまち値段が跳ね上がったときがあるのだ。その違いがぼくにはいまだ理解できない。

先日東京の市会で、たしか「少女ブツク」（？）という漫画雑誌だったと思うが、6冊ほど出品されていた。発行年はたしか



昭和三十年前後（ぼくが小学生の頃だ）だったと思う。見れば背などの一部が擦り切れているのもある。「このときはこの「少女ブック」のほか古い漫画雑誌が3点ほど同じ雑誌ごと数冊づつ出品されていた。

これらが、いくらで落札されるか興味を持った。この神田の通常市では最低値段は2千円と決められていて、入札希望金額が1万円以下なら2枚札といて、2種類の値段を、1万円以上なら3枚札（3種類の値段・値段のくらいが上がることに枚数が増える仕組みである）を書くことが可能なのだ。

それで結果は、この「少女ブック」の落札額は4万5千円台だったのである。落札者の札を見たら5万円台4万円台3万円台が記入されていた。このときの他の雑誌もすべて1万円以上で落札されたのである。考えてみると、この落札額は、古本屋が古書の市場で落札した値段であるから、これが読者（コレクターと呼んだほうが適当かな）の手に渡るときは1冊いくらになるのだろうか？本主に分らない世界である。

この市での模様を骨董市を紹介してくれたSさんに話したら、驚きも見せず、「なるほどね」と納得したように言うのである。ぼくはSさんに、4万5千円もの値段がなげついたか聞いてみた。Sさんはそれを見てもいないのに「それにはたぶん手塚治虫の『リボンの騎士』かなにかが載っていたのだと思う」と、たちどころに答えただの。これには、さらに驚かされた。Sさんもこの種のサブカルチャーを主に

した古書店主で、古本屋仲間にその存在を広く知られているのであるが……。古本屋のプロというものを改めて認識させられた思いである。

まあ、ぼくの場合は、かろうじて判断できるのは子ども本ぐらいで、他の分野は今のところ手探りで買っているという段階である。何を根拠に買うのかといえば、自分の趣味の分野や興味を惹くものというしかないのである。だから、いまのところは、芸術・伝統芸能（歌舞伎・落語など）・伝統工芸（染色など）や芝居関係や山関係の本を注目しながら少しづつ買っている。それと、これから増やしたいのが、自然関連の本である。

これは市場で買う時の場合で、個人からの場合は分野は問わないことにしている。もちろん古書としてあまり価値がないのはお断りするが、判断がつかない場合は神田の市場（プロの集団の中で判断を仰ぐ）に出品してみることにしている。ここで誰も買い手がなかったり、安値だったら、古書としての価値がないのだから、値段が付けば、それも高値がつけばバンザイということである（そんなのは滅多にないがね）。

### さて、骨董市に戻ろうか。

ぼくの落札した「本の山」に他の古本屋は、なぜ興味を示さなかったのか、そのあたりを少し推理してみたい。

それは、出品された本があまりにも平凡（多く出回っている）で、希少性が全くな

いからだ。この場合は、あくまでも本の内容でなく古書としてということである。この手の本はすでに自分の店にあるだろうし、なくても市場でいつでも手にはいるのだから、わざわざ骨董市で買つ必要はないのだ。骨董市まで出かけてくる古本屋は、はなからそんなものを求めているわけではなかったのである。

自分の家から車で十数分で行けることもあり、ぼくは骨董市を紹介されてからは、月に2度ある市にはたいがい顔をだしているが、最初に落札した「本の山」のようなのは、それ以降の市にはたまにしか出てこない。骨董市では、この手のものは主流ではないようだ。また、でてくればこれを落札するのは、ぼくのことが多い。

なぜぼくは、これらを落札するのかといえば、一般書を扱いだしてまだ日が浅いので基本的な本が少ないことと、この3月に借りた倉庫のキャパシティに余裕があるからだ。それに古本の市場より競争相手が少ないから、安く手にはいるのである。だが、骨董市だからこそその落とし穴もあることを後で教えられた。

本などを骨董市では、「紙類」とか「紙もの」と呼ぶのであるが、その「紙類」には本以外に「古い絵葉書」（主に明治）戦中・出品の量や内容にもよるが、ほとんどが万単位の値段が付くことが多い。ぼくには、まだ売り方を含めて全然分らないが、興味があるので、勉強中。これは古本屋以外の人も買うようである、需要範囲はもう

少し広いようだ)。「和綴じ本・浮世絵・古文書」(明治)それ以前の)「双六・メロンコ」「ポスター・パンフレットなど」「戦争以前や終戦直後などの商品のカタログやリーフレット・チラシ」「掛け軸・絵」・・・おもしろいのが、「エンタィヤー」とよばれるもので、これは使用済み(消印のある)の古い葉書や手紙の封筒のことで毎回必ず出品されていて、結構な値段が付く。(これについてはまた別の機会に話しますね。Yahooのオークションにはエンタィヤーというジャンルがあり、びつくり。世の中にはいろいろなコレクターがいるね。)まあ、古い「紙もの」なら何でもという感じである。

これも最初の骨董市でのこと、たしか4冊ほどの子ども本がお盆に載せられていた。手に取って見ると、中の1冊は昭和三十年前半のSFものだった。(やはり小学生の頃のもので、ぼくはこの手の本を夢中で読み、SF映画にも夢中になったものだ)次に手に取った本は裏表紙が剥がれて無い、そのことでもうぼくはその本から興味が離れ、残りの本はよく見なかったのである。買うにしても3千円ぐらいまでだと考えた程度であった。

ところがなんと、この4冊の本(実際はぼくが見なかった、中の1冊)こそ古本屋仲間の、今日の目玉だったのである。競りが始まる。「この子ども本、千円でどう?」するといきなり「5千円!」と誰かが応じた。つぎが「1万円」、今度は「1万5千円」さらに、「2万5千円」ぼ

くは「うとうう・・・」声もでない。結局これは3万5千円で落札されたのであった。

Sさんに聞いてみる。「あのなかには、山中峯太郎の×××があつて、それでみんな競つただけで、ぼくも5万円までなら買うつもりでいたけど・・・」というのである。それを聞いていた浜松のJ屋さん(この人は浜松古書組の中心の一人)「ぼくは6万円まで出すつもりでいた。だが、トイレにいつている間に競りが終わつてた。今日はこれが目的だった」というのである。

SさんはSさんで「ぼくはJ屋さんとNさん(落札した人)で話がついていると思つて、途中で遠慮したんだけど」というのである。さらにこれを落札したNさんが骨董市の翌日ピツポに寄つてくれ、「あれを3万5千円で買えるとは思っていなかった。みんなもつと競つてくると思っていたのだ・・・。」というのである。

こうなると、いずれもタヌキかキツネに思えてくる。そのタヌキにもキツネにもなれないぼくは、古本屋としてはまだまだ、駆け出しであることを思い知らされたのだ。さきほど書いた、「ぼくがわかるのは、子ども本だけである」ということも取り消さなければならぬようである。

駆け出しであるぼくに、親切にいろいろ教えてくれるのが、浜松のJ屋さんだ。ぼくは骨董市には、「紙もの」の振りが始まる夕方六時過ぎにいくのであるが、いつても浜松のJ屋さんは、既に会場にいるのである。

ある時、少し早い目に会場に着いた。タンスなどの大型の振りは既に始まつていたが、そのときもJ屋さんは会場にいた。そこで、ぼくは聞いてみた「J屋さんは何時頃ここへくるのですか?」すると、「ぼくは3時頃にはここへ来ているよ。時間をかけて、下調べをするためにね」というのである。

J屋さんは、以前からぼくを見ていて、危うさを感じていたのだろう。これを機会にと思つたのか、下調べの必要性和、その調べ方を教えてくれたのである。骨董市では、落札したら、落札物に欠陥があつても返品や苦情は受け付けられないのである。古書市の場合は、事前に目立つ欠陥を示してない場合には、たとえば「線引き」や記名があつたり、落丁や頁破れが見つかった場合は、一週間以内なら、返品や値引き交渉が可能であるのだ。ぼくもこれまで、数度返品や値引きをして貰つたことがある。だから、J屋さんは早くから来てチェックしているということだ。

そう言えばSさんも前日か当日の昼間、必ず下見に出かけるといつていたのであるが、ぼくはそのことを重要には考えていなかったのである。

J屋さんは落丁や、傍線、切り取り・・・などのチェックの仕方を、その場で本を手にとつて教えてくれたのであった。(これもプロのやり方があるのだ)これらのことは、新刊の本屋ではすべて必要としないことなので、ぼくには驚きであった。

(次号へ続く)